
もう一つの大空

真菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一つの大空

【Nコード】

N9092Y

【作者名】

真菜

【あらすじ】

成績優秀スポーツ万能の市。そんな彼女の元に突然現れたりボーン。彼との出会いが運命を大きく変える！ セツタンセツテの読みきりを読んでいたとき、ツナに姉がいたと知って、成績が優秀だった(らしい)姉がボスだったらどうなるんだろーなーという考えから作りました。

標的 1 リボン来る！

「市！そっちに行つたよ！」

「OK！」

スパアン

「やったーっ！」

アタシは沢田市。

並盛中学に通う中学二年生。

自分で言うのもなんだけど、勉強にスポーツ、何をとっても指折りの学校トップクラスの成績を誇る。

コートを片付けると、アタシは彼の元へと駆けていった。

「恭ちゃんっ！や・く・そ・く」

「ハア。分かったよ。買えばいいんでしょ、ケーキ」

彼は我が並中の象徴ともいえる、風紀委員長の雲雀恭弥。

年齢不詳でアタシが入学したときには既に風紀委員長の座についていた強者。

アタシはそんな彼の元で風紀委員長補佐と言う役職についている。

おかげで彼と仲良くなることができたし、部活の試合のたびに「褒美を買ってくれる。」

「但し、一つだけね」

けど、頑固なのがたまにキズ。

「え〜」

「そんな態度を取るなら、次から買ってあげないよ」

「ゴメンチャイツ」

「買ってあげない」

「すみませんっした!」

「……言葉には気をつけなよ」

それだけ言うと、恭ちゃんは体育館から出て行った。

あゝケーキのためとはいえ、頭下げちゃったな。

ま、いつか

よし、家に帰ろう。

歩くこと二十分。

そこにアタシの家がある。

「ただいまーっ」

「イツちゃんお帰り。帰ってきて早速なんだけど」

「分かってるって。ツナの勉強でしょ？」

バツが悪そうな顔をする母さん。

アタシには弟がいる。

アタシとは正反対で、勉強もスポーツも何をやらせてもダメダメで、学校で指折りのトップクラスの頭の悪さを誇る。

いや、誇っちゃダメだけど。

皆は彼をダメツナと呼ぶ。

「いいじゃない母さん。今がダメな分、将来が楽しみでしょ」

アタシだって始めから何でもできたわけじゃない。

人は努力次第で変われることをツナに教えたくて、アタシは自らツナの家庭教師を進んで受けた。

コンコン

「ツナ？入るよ」

ガチャッ

「わっ姉さん！？勝手に入らないでよ！」

「いま、ノックと断りを入れたからね？」

散らかった部屋に寝転がり、ひたすらゲームをやる弟。

あたしは呆れながらも部屋の片づけを始める。

「ほうら、ツナもさっさと片付けなさい。勉強やるわよ」

「またー！？どうせ何やったってダメツナなんだからほっといてくれよ！」

「ツナ！」

文句を言うツナに思わず声を荒げてしまう。

「ツナ、最初から何でもできる人なんて一人もいない。アタシだって昔はツナみたいにダメダメだったんだから」

「え？姉さんが？」

「人は変わる”。アタシはそう信じてる」

「……いじめ」

「分かればいいのよ」

アタシはツナの頭をクシャクシャと撫でた。

そして机にノートと教科書を広げる。

「さ、始めましょ」

涼を求めるために大きく開け放たれた窓から聞こえるスズメの声で目が覚めた。

ツナの部屋。

どうやら勉強したまま眠ったらしい。

ツナはベッドですやすやすと寝ていた。

アタシはツナを起こさないようにそつと部屋を出ると、自分の部屋に戻った。

まだ朝早い。

二度寝しても大丈夫そうね。

「おやすみ」

誰かに言ったわけではなかった。

だから、返事が返ってきたとき、心臓が止まるかと思った。

黒いボルサリーノに黒いスーツ。

黄色のおしゃぶりを持ち、ボルサリーノにはカメレオンを乗せた赤ちゃん。

「……………」

「ちゃオッス。お前が沢田市だな」

「……………」

「少し早く来ちまったが問題ねーな」

「……………」

「黙ってないで何かいったらどうだ？」

「……………きゃあああああああ！……！」

結論。悲鳴を上げる。

だってそうすればツナか母さんがおきるでしょ？

……現実そう甘くないね。

どうして誰もおきてくれないのかしら。

拳銃の果てに赤ちゃんに銃を突きつけられた。

「ア、アハハ……。危ないなあ、そんな物騒なものは赤ちゃんが持つてはいけないのよ？」

と言うよりここは日本だけだね。

銃を近づけられて両手を挙げる。

……って「おもちゃじゃん！」

「うーむ。このアタシがおもちゃで脅されるとは……」

そう呟くと赤ちゃんは小さく反応した。

「よくおもちゃって気付いたな。よし、合格だ」

「合格……って何が？」

「オレはお前の家庭教師としてきた、リボンだ」

「ボク、ちょっと待ってってね？」

手早く携帯を取り出して番号を押す。

そして呼び出し音になる。

ガチャッ

『もしもし』

「もしもし、警察ですか？」

ズガン

一瞬だった。

ほんの一瞬のうちにアタシの形態は粉々に打ち砕かれた。

『イツちゃん、どうしたの？今、変な音が聞こえたけど』

今頃か！今の音で起きたのか母さん！

鈍感すぎるぞ！

部屋を飛び出て母さんの元へ行く。

「母さんどういうことよ！アタシの部屋に家庭教師を名乗る変な赤ちゃんがいるんだけど！！！」

「家庭教師？」

あれ？と言う顔をする母さん。

もしかして母さんの仕業じゃない？

ってことはやっぱりあの赤ちゃんは不法侵入で……

「まあ早いわね。昨日の夜に電話したのに……あらいっちゃん。母さんをどこに連れて行くの？」

「外」

母さんの手を引っ張って外に出る。

一体何なのよこの母親は！

天然で自分の行動に悪気は一切ない。

この人には誰も勝てないわね。

「どういふことか説明して頂戴」

「ほら、市も来年は受験生でしょ？今の子達は一年生から勉強してるって言うし、市はツナの手倒れも見てくれるから、自分の勉強を怠ってないか心配なのよ。そしたら昨日の夕刊に面白いチラシが入

つてたの」

「見せて」

差し出されたチラシをひったくるように取る。

なになに……

“お子様を次世代のニューリーダーに育てます。学年・教科を問わず。 リボン”

怪しすぎるでしょ！

「そもそもアタシに家庭教師なんて要らないわ。三年になったら塾にいけばいい話でしょ!？」

溜息をつきながらもつ一度チラシに目を落とす。

あれ？リボン？確かさっきの赤ちゃんの名前も……

まさかのマジな話!？

「ハア。今度からこーゆー話は本人に相談してからにしてほしいわ」

乱暴にドアを閉めて自分の部屋に戻った。

案の定、リボンが待っていた。

「話は終わったか？」

「ええ。一応あなたが家庭教師ってことは信じてあげるわ」

「随分と上から目線だな」

だって年上だもの。

「それで一体何者なの？ただの家庭教師なわけではないわよね？」

「流石だな」

何でだろう。

いちいち馬鹿にされてる気がする。

「教えてやる。オレの本当の仕事は、お前をマフィアのボスにする
ことだ」

「へ〜ぶん……っで、ええええ!!?!?!?」

「オレはある男から、お前を立派なボスに教育するように依頼され
てんだ」

その人のところに抗議に行きたい気分だわ。

「やり方はオレに任されている。一発撃つとくか?」

そついうとライフルをアタシに向けてきた。

「ちよっ何する気!?!?」

「でも今じゃない」

そのときだった。

ぐるる

リボーンのお腹がなった。

「あばよ」

風のように現れて、風のように去って行ったりリボーンだった。

部屋には時計の音だけが響いている。

時計の音が……………

「きゃあああああ!!」

不覚にも本日二度目の悲鳴。

「母さん!食パン一枚頂戴!遅刻する!恭ちゃんに咬み殺される!」

慌てて家を飛び出す。

恭ちゃんに約束された“風紀委員登校時間”まで、あと五分。

アタシじゃどうがんばっても十分はかかる。

「オレが手伝ってやろうか？」

チャキという音と共に聞こえてきたりポーンの声。

見ると、塀の上にラジコンのような物に乗ってついてくるりポーン
の姿があった。

「銃を手にして何を手伝うって言うのよー！」

「お前を殺すだけだ」

「ちーばー！」

“殺す”と言うワードが聞こえてきた瞬間に全力ダッシュ。

殺されてたまるもんですかっ

何とか撒いたかな？と思ったら、今度は小さなバイクに乗って追いついてきた。

銃をアタシに向けて。

「嫌ああああっ！！」

速すぎるよ！バイクなんて卑怯だよ~~~~！！

これこそまさに「リアル鬼ごっこだぞ」「……っつて

「台詞を取らないでよー！」

「よそ見していると撃つぞ」

「なんでこーなるのよー……！」

そのままアタシは、リポーンと言つ名の恐怖を後ろに見ながら学校へと走つていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9092y/>

もう一つの大空

2011年11月27日07時00分発行